

金沢大学フォーラム

総合テーマ	「地域と金沢大学—地域の活力と金沢大学の知を結ぶ—」
日 時	平成15年3月2日（日）14:00～17:00
場 所	金沢シティモンドホテル（2階 友禅）
総合司会	松坂 浩史（金沢大学総務部総務課長）

挨拶

林 勇二郎（金沢大学長）

金沢大学の歴史と地域貢献

本学は、今年度の文部科学省の「地域貢献特別支援事業」に採択され、石川県、金沢市、あるいは県内の多くの自治体と連携しながら地域貢献の活動に取り組んでいます。このフォーラムもその一環であり、すでに輪島市、加賀市においてタウンミーティングを実施し、多くのご意見、ご要望をお聞きしています。

本学の起源は1862年、彦三の加賀藩種痘所、卯辰山にできた養生所にさかのぼります。その後、明治7年に石川師範学校、明治20年には第四高等学校中等部、大正に入って金沢高等工業専門学校となり、1949（昭和24）年に新制の総合大学として統合されました。この歴史の中で、金沢大学は教育界、医療界、工業界等において大きな役割を果たし、また国や地方に有為な人材を提供してきており、すでに大きな地域貢献の事業をしてきたことになります。しかし、これは一方的な提供ではなかったか、提供と同時にフィードバックがきちんとなされてきたかということではいささか疑問もあります。

今、金沢大学は角間にメインキャンパスを移し、かつて城内にあったときのような石垣も門もなく、皆さんに開放されたかたちで存在していますが、残念なことにまちなかと距離があるということで、あまり訪れる人はいません。離れたことによって、また大学の法人化に伴いまして、金沢大学はこれから地域貢献をやるべき責務があることをいっそう意識し、活動することをまず市民の皆さんにご理解いただきたいと思います。

グローバル化の時代を迎え、国のみならず地方都市においても世界と競合、共存しなければなりません。そのためには、活力ある都市、個性ある都市、クリエイティビティの高い都市であることが条件となります。その中で、大学は



社会の中にあることが問われ、地域は大学を巻き込んだ知的な地域であることが問われるのではないかと思います。

本日の基調講演、パネルディスカッションを含めまして、フォーラムが活発なものとなり、これからの地域と大学の関係が互いに進んでいくきっかけになれば幸いです。

基調講演

「地域と大学が創る文化」

樺山 紘一 氏（国立西洋美術館長）

地域と大学の対話の大切さ

私は、白山比咩神社にゆかりの深い東京小石川白山に住んでいますが、15年近く前にここで東京大学理学部附属植物園（俗称、小石川植物園）を巡って議論が起きました。

かつて江戸幕府薬草園として、日本国内のみならず中国、オランダなどから植物が集められ、青木昆陽がサツマイモを開発した場所としても知られるこの広大な植物園は、私ども白山町内会のど真ん中に割り込むかたちでどっしりと鎮座しています。

あるとき、町内会の会合で「植物園にある木から落ち葉がたくさん降ってきて道路や家が汚れる。これを何とかできないか」という主婦の方々の苦情が出されました。それを発端として、ある人は「木が大きくなつて日当たりが悪くなる」、またある人は「池にボウフラがわいてカガ发生して困る」、さらには「町会の真ん中にあって、向こうの地下鉄に行くのに大回りをしなくてはいけない。せめて通路を造ってくれ」と、だんだん話は過激になっていったそうです。

そこで、この話をまとめて町内会長が植物園に掛け合いに行きました。しかし、植物園側からは、「周辺の人が堀を越してごみを中に捨てていくのもひどいし、そもそも我が国において学問上きわめて重要な役割を果たしている植物園だから、住民につべこべ言われる筋合いはない」というトーンの返事があり、町会長は怒って帰ってきて、こうなったら植物園と闘うしかないという話になったそうです。

運悪く、私はそのころから東京大学の管理職を務めており、大学と町内会の板ばさみになってしましました。考えてみれば、住民とそこに植物園を持っている東京大学との間でほとんど会話がなかったことが不自然だったのです。そこで、町内会と東京大学にとにかく対話を始めてくれるようお願いしました。

もちろん私がお願いしたからというわけではなく、世の中には大学と地域社会はもっと密接であらねばならないという大きなものの考え方の変換が起こりました。その流れの中で、大学と地域は対話しながらやっていかなければいけないということが少しずつ理解されはじめたと思います。

現在では、植物園の園長が町内会の連合会で、植物園の役割や、今咲いている花などの話をわかりやすくお話ししてくれたり、町内会も子どもたちを連れて植物園を見に行ったりするようになりました。また、このような関係が始まつ



てから、町内会の人たちも、植物園を迷惑な施設ととらえずに、森林浴のもとであると同時に、日本あるいは世界における植物学の発展に大きく寄与しうる施設でもあることを実感として理解するようになりました。

植物園は大学そのものではありませんが、大学の研究教育が行われる場所です。したがって、それが持っている学問上、文化上の意味合いはきわめて重いのです。しかし、それだけでなく、地域社会とのさまざまな連携関係を持ちながら成長していくことが、住民にとっても、また教育研究の当事者にとっても大事なのだということがわかりはじめてきたと思います。

対話から生まれる変化

この事例において、実は2つの大きな変化が起こっています。大学側の意識や態度の変化したことと、地域社会の側に大学との間にどのような関係を持つかということについて新しい考え方方が生まれたことです。

大学側は長い間、大学は地域社会とは別格のもので、教師と学生とそれにかかわる人間だけが学問研究を行う場所であると考えがちでした。しかし、近年では、大学組織の管理・運営の問題と並んで、社会との連携関係を豊かに実現することができるかどうかが、大学の価値を決める最も重要なポイントの一つであると考えられるようになりました。そこではいわゆる产学協同も重要ですが、地域社会で起こってくるさまざまな問題を仲立ちとして、大学と社会との間の関係をより密接に作り上げていき、結果として両者にとって意味あることを作り上げていくことがきわめて重要であると認識されてきました。

大学の外の方々が見ると、大学の人間はみんな威張っていて、学問と教育だけができるべきと考えているとお思いになるかもしれません、確実にこのような変化があることをご理解いただきたいと思います。

また、地域社会の側も、この20年ほどの間に大きく変化を遂げてきています。もちろん地域社会は急に生まれたものではありません。人間社会が存在するかぎり人の集落はあるし、その集落とその土地が作り上げる地域社会も昔からありました。かつて日本が農業社会であったころには、村という組織があり、村落共同体を仲立ちとして生産を行い、人間の生き死にもそこでとり行われていました。

しかし、20世紀から21世紀にかけて、日本だけでなく世界のどこでも、村落共同体はその姿を大きく変えようとしています。かつて村とよばれていたような意味での共同体は、現在の日本にはほとんど存在していません。その結果、東京やその他大都市を中心により大きな組織体が出来上がり、私たちの生活のあらましはその中で編成されるようになりました。かつて地域社会にあった生産活動は、ほとんどが工場で行われるようになりました。国民経済として編成された産業体系の中に組み込まれてしましました。同時に、政治や社会組織全体が、地域社会を越えてより大きな規模で編成され、ついにはグローバル化時代となって、もはや個人や家族が住んでいる小さな地域社会はほとんど意味を持たないかに思われるようになりました。

そしてそうなったときに、はたしてそれでいいのかという反省や批判が生まれ、1970年代後半からは「地方の時代」など、さまざまな提唱が行われました。それは公害問題に端を発し、自分たちの住んでいる地域社会をどう再編成するか、失われていこうとするさまざまな地域社会の要素をどのように組み直していくかという運動になりました。そして、そもそも地域社会とはどんなものなのか、それが今失われつつあるとすれば、それに代わってどんな新しいかた

ちの地域社会をつくっていけばいいのかという問題が私たちの間に登場してきています。

地域社会は、私たちの生活の場所であり、幅広い機能や役割を持っています。とりわけ、老齢者の介護などの福祉、子どもたちを育てるといった事柄は地域社会に深くかかわっています。あるいは、阪神・淡路大震災を契機に、私たちの生命や財産の安全という問題を考える際に、地域社会が重要な役割を果たすことをみんなが理解しはじめました。

地域の環境がどのように保全され、ときに創造・改革されるかは、ひとえに地域社会がそこにどう参画できるかにかかっています。もちろん国家レベルの環境政策はありますが、それを実地に移していくのはそれぞれの地域社会の役割であると私たちは考えはじめました。それは例えば町内会であったり、NPOであったり、さまざまな団体がありますが、そうした地域社会を仲立ちにして安全の問題、環境の問題、福祉の問題に取り組まなければ何も解決しません。

このようにして、一方では大学側が社会に対して向ける目を変え、他方で地域社会が自身で地域のあり方を考えはじめたとき、問題はこの2つがどのようにしてお互いを理解し、連携できるかということです。事態は少しずつしか変わっていかないかもしれません、確かに新しい道を模索できる条件は熟してきているという気がしてなりません。

地域とともにあるヨーロッパの大学

このような問題を考える際のヒントとして、一つだけ紹介しておきたいと思います。私はもともと西ヨーロッパ社会を研究の対象としている関係で、30年ほど前、パリにあるソルボンヌ大学で勉強する機会を得ました。ヨーロッパの多くの大学はまちのど真ん中にあります。大学の周りに市街地が出来上がったというのが正しいかもしれません。

ある日の講義中、窓際の歩道で買い物帰りのおばさんたちが井戸端会議を始めました。その声が先生よりもはるかに大きくて先生の話が聞こえません。そのとき、プロフェッサーは「だめだこりゃ」と言って、15分ほど講義を休もうという話になりました。通常であれば、「大学の講義をしているから、おばさんたちはあっちへ行け」と言いたいところですが、「まちの中に大学があるのだからしょうがない」という雰囲気がありました。

先程、学長が金沢大学には門がないとおっしゃいましたが、ヨーロッパで中世以来何百年間続いてきた大学のほとんどには門がありません。どこからでも入れるし、また、どこから出ることもできます。教室の外で買い物かごを持っておしゃべりを続けること自体とがめるべきものではありませんし、大学はまちの中にあるのであって、市街地から起こるいろいろな問題は大学も共有せざるをえません。同時に、大学はそのまちの一部分であって、地域が必要なサービスを行うことはごくあたりまえのことと考えてきました。

また、まちの中にある大学を街頭型大学とよぶとすれば、キャンパス型大学とよばれるものも生まれてきました。これは、郊外の広い場所に大学専用の用地を獲得し、そこに大学の教育・研究その他、学生や先生の宿舎に至るまでひとまとめに配置し、都市と離れたところ大学をつくるものです。イギリスのケンブリッジ大学、アメリカのハーバード大学などがこれにあたると思いますが、こうして出来上がった大学も間もなく必ず都市の中に組み込まれていきます。そして、これまで持っていたキャンパスのさまざまな機能や役割を、都市と共同させながら新しい発展の道筋を選んできました。

このように大学のかたちは少しずつ違いますが、いずれも大学が生まれ、そこに学生が通い、先生が通い、研究が行われるというさまざまな活動を、都市やその他周辺の社会とのかかわりの中から選びとつていったのだと思います。その意味で、ときに大学は象牙の塔とよばれるこ

ともありますが、実は常に地域社会との深い連携の中にあったということは疑いがないことです。

21世紀は大学と地域のパートナーシップの時代

今後、21世紀の大学はどのような方向で地域社会と接点を持つことができるでしょうか。大学の側は大きな発想の転換をし、研究教育だけでなく、産業界、地域社会等のさまざまな他者の関係をつくり出しながら自らを変えていく役割が必要だということがわかりました。そのためには、相手方の地域社会や産業界が何を考え、何を必要としているか、また、どのような関係を取り結ぶことによって、自らの研究教育も豊かにできるかについてかなり賢明で具体的な戦略が必要です。

他方、地域社会の側から考えても、同じようにさまざまな戦略、発想が必要です。20世紀以降、古い地域社会が大きく変化し、ときには崩壊し、その中から新しい地域社会を生み出していくためには、自分たちがどのような地域社会の中に生きているのかという自覚と、それをどうつくっていくかという戦略抜きでは地域社会は蘇りません。その戦略の中で、自らを理解し、つくり替えていくパートナーとして、大学は格好の相手の一つです。

大学の先生も学生も地域社会の住民であり、同時に、大学は高度な情報や知識の集積を持っています。また、その地域社会にとってきわめて重要な資源になる環境や景観も持っています。最初の例でいえば、小石川植物園という膨大な景観や環境は、大学固有の資源として作り上げられてきましたが、これからは地域社会が共有し、地域社会を再編成していくために必ず有効な資源となるはずです。地域社会としては、まさしく大学という知識、人材、環境の面で大きな資源との連携関係をどう豊か築いていくかについての戦略を立てなければなりません。

これは、もちろん相手のあることですから、お互いの発想も違いますし、ときには緊張関係も起こるかもしれません。しかし、ともかくお互いが自らを変えていくこうとする大学と地域社会の間の連携は、いずれ私たちにとって有益な結果をもたらすに違いないと思います。とりわけ金沢は、加賀百万石の時代にさかのぼれば、一方では武士をはじめとするさまざまな地域社会の仕組みがあり、他方で町人たちがそれぞれのかたちで町人社会を構成してきたはずです。そこでは福祉の問題、環境の問題、ものをつくる生産業の問題に至るまで、それぞれの戦略を持っていたと思います。同じように、学問の蓄積、工芸をはじめとするさまざまな技術の蓄積がありました。これらの間には必ず有効な連携があったはずです。

その意味では、金沢大学、また金沢市など、地域社会の方々が、金沢で蓄積されてきたさまざまな伝統、情報、経験をもとにしながら、新しいかたちでの大学と地域との結びつきを必ずやつくっていただけるものと確信しています。

質疑応答

(Q) 今、社会が非常に厳しい状況ですが、1930年代の世界不況のおりに、アメリカではニューディール政策のほかに文化政策を行って立ち直ったと聞きました。日本ではそのあたりはどうでしょうか。

(権山) 文化政策といわれるものの中には、博物館や美術館をたくさん建てたり、出版やそ

の他の活動に援助をしたりいろいろなことがあります。今までこうしたものは経済的効果が少ないと考えられ、それより公共事業をやった方がいいといわれがちでしたが、これ発想がまちがっていると思います。

もちろん文化政策は景気の浮揚に直結するわけではないかもしれません、時間をかけてゆっくりと社会を熟成させていくためには、文化政策はきわめて重要で意味があります。私どもも多少それにかかわりを持っている人間として、今後、政府をはじめとして各方面に私たちの考えを申し上げていきたいと思います。

金沢大学の地域貢献推進事業の概要説明

水野 昭憲（金沢大学地域貢献コーディネーター）

金沢大学の地域貢献推進室は昨年5月からできたものです。今日は、金沢大学が取り組んでいる地域貢献の基本的な考え方を紹介させていただきます。

金沢大学は21世紀に入って、人類の知的遺産の継承と革新を目指す、地域と世界に開かれた大学を目指す、そして未来を志向し変革し続ける大学などの基本理念を掲げています。そのうちの1つに、「主体的に地域と交流するアカデミア」というのがあります。言い換えると、生涯学習と社会的連携、協力を推進する大学を目指すということになります。具体的な目標としては、地域社会への貢献、キャンパスの開放、産業界との連携、情報の提供などを挙げています。

実は金沢大学も昨年からこの事業を立ち上げたところです。文部科学省が昨年、「自治体と国立大学の将来にわたる真のパートナーシップの確立」というタイトルを設けて、その事業を全国に募集しました。そして、全国73大学から申請があった中から15が選ばれ、中でも金沢大学は第1次で採択され、モデル校として期待されています。

金沢大学・石川県・金沢市連絡協議会というかたちでこの事業を展開していますが、この3者が連携しながら事業を決める背景には、県民、市民という住民があるということです。具体的には、自然、文化、人づくり、交流、にぎわいという5つのキーワードがあり、事業のカテゴリーとしては、生涯学習、医療、人材養成、文化、地域課題、情報発信、国際交流があります。

いくつか代表的な事業をご紹介します。1つは、金沢市西町教育研修館の中に開いているサテライトプラザで講座や相談室を開いたり、金沢市が中心に行っている子育て支援の活動に協力したり、外国人留学生を小中学校へ派遣したりしています。また、香林坊ハーバーの活動を3大学（金沢大学・金沢工業大学・金沢美術工芸大学）の学生が運営しているのを支援しています。また、角間の

キャンパス200ヘクタールのうち、70ヘクタールをそのまま里山として残しています。この里山は、地元の子どもたちや、金沢市あるいは周辺の人たちの自然観察、自然教育の場として開放し、石川県のいしかわ自然学校や金沢の子ども科学財団など、たくさんの団体と活動をしています。

ほかにも、「金沢学」という言葉を使って、金沢で金沢以外の学校に行っている留学生た

ちの体験学習を行います。この講座は市民にも開放していきたいと思っています。さらに、大学の教官とその研究内容あるいは講演内容等の情報をデータベース化し、皆さんに使っていただけるようにしようという準備もしています。

これまで能登と加賀でタウンミーティングを行いましたが、地域の皆さんの大学に対するご意見、ご要望を伺っていますので、いくつかのご紹介します。何といっても、これまでお互い顔が見えなかったというのが全般的な印象で、いろいろな施設をつくり、情報をもっと出してほしいというご要望がありました。また、過疎地の問題、伝統産業の振興の問題などを一緒に考えてほしい。特に能登では、トキがすめる能登の里を復活したいというお話があり、早く金沢大学の里山自然教室と連携して活動が始まったところです。

人づくりでも、最近の小中学校の先生たちが委縮しているという気持ちが地域の人にはあるらしく、もっとのびのびとしたものにしてほしい。さらに、能登ではクリーンエネルギーや深層水の問題、能登・加賀共通に観光の問題など、一緒に研究してほしい。このようなことをしながら、我々も地域の皆さんと何ができるのかを求めているところです。

パネル討論 「市民から見た大学の役割」

パネリスト

谷内 迪子 氏（いしかわ子育て支援財団専務理事）

坂本 浩 氏（金沢子ども科学財団事務局長）

吉田 洋 氏（NPO法人金沢創造都市フォーラム理事）

西川 雄蔵 氏（金沢青年会議所副理事長）

コーディネーター

水野 昭憲（金沢大学地域貢献コーディネーター）

（水野）社会連携、社会貢献が金沢大学で実際に使われるようになったのは、2000年4月、金沢大学フォーラム「地域と金沢大学」という、今日と同じタイトルのフォーラムが行われたときからです。ただ、このときは地域といっても商工関係の方が中心で、パネリストにも産業界からお越しいただき、パネルディスカッションが行われました。当時は、产学官連携がようやく軌道に乗りつつあった時期で、そこの議論から金沢大学には共同研究センターができ、产学連携のためのコーディネーターが置かれるなど大きな展開がありました。

本日、我々の目指しているのは、市民活動、市民団体、市民グループとどう連携していくべきかということを探りたいということで、副題も「地域の活力と大学の知を結ぶ」としています。今、地域にいろいろなグループができ、活力が生まれています。例えばNPOの流れにしても、非常に大きな動きがこの数年であったと思います。そういうものと大学はどう連携していくべきか



かということをお話ししてみたいと思います。

まず、それぞれの立場から、大学へのご意見、ご要望をお伺いします。

子育て支援の場としてのキャンパス開放

（谷内）私は材木町校下の桜町に住んでおり、大学がお城の中にあったときも、角間に移ってからもちょうど中間で、金沢大学がそこにあることは十分理解していました。しかし、今回パネラーを頼まれ、実は金沢大学の状況を全くわかっていないことを知り、慌ててインターネットから情報を得ました。

お城にあったときも、やはり金沢大学は遠くにある、何か庶民が入り込めないところという印象がありました。また、角間に移ってもそれはあまり変わりません。全国屈指の面積を誇る大学ということですが、私はその大学を学生さんだけが使っていいのだろうかと思います。

少子化が進む中、それに対応する施策を推進する機構として、平成8年10月にいしかわ子育て支援財団ができました。子どもが少なくなる中で、児童虐待、非行、不登校などが非常に増えてきました。若い母親は、24時間子どもと密に接する中でストレスに悩んでいます。さらに保育所等へ上がっても、働くことと子育ての両立で悩み母親も少なくありません。これまでのように大きな家族で生活しているときは、たくさん的人が子どもをみてくれましたが、核家族化や都市化の影響で親のストレスは大変大きくなっています。さらに、女性が高学歴化し、どんどん社会へ進出しているにもかかわらず、依然として子育ては母親の負担が大きく、結婚や子育てを選ばない人たちも増えてきているという現実です。そんな中で、家庭で子育てをしていらっしゃる人たちを支援するために、この財団ができたわけです。

今、大学生の人たちが広大な面積の中で学んでいらっしゃいますが、一方では、小さな保育所の中にたくさんの子どもがひしめいています。そこで、親子の遠足などで大学の敷地を活用し、学生たちがそこに来た子どもたちとふれ合う場にするということを提言します。近ごろ、小さいころから子どもと接する機会が少なく、親になりきれない大人が多くなっていると聞きます。そういうところで学生たちが子どもたちとふれ合えれば、小さい子どもの状況がわかりますし、子どもも将来この大学を目指したいという夢のある場になると思います。

また、生涯学習の場として大学を開放していらっしゃるとのことでしたが、子育てをしている人たちもそこに参加できるよう、学内に保育施設があればとてもいいのではないかと思っています。

大学の地域活動への参画とその業績評価

（坂本）金沢市は、中学・高校の理数に優れた子どもたちを励ますために、高峰譲吉博士顕彰会をつくり、毎年表彰をしてきています。その活動が2000年に50周年を迎えることを機につくられたのが、この金沢子ども科学財団です。金沢は科学者を生み出す伝統的風土がありますが、それが最近の理科ぎらい、理科離れ等で失われつつあります。そこで、この財団をつくって、学校教育の枠にとらわれず、子どもたちが自ら体験的に理科のおもしろさを学ぶ活動を行っていこうというものです。

事業内容としては、西町研修館の2階と3階に実験室と科学相談をするサロンを設け、教育事業、



普及活動、それから大学や企業との交流などを中心に行っています。そして、指導者には財団の人間のほかに、金沢大学の理学部の先生なども参加されており、場合によっては大学院生が主体的になって指導していただいている。また、部屋の中の実験だけでなく、里山自然学校と財団が連携し、角間を歩いて観察することからスタートし、継続性のある活動をしていきたいと考えています。

ただ、大学にはまだいろいろな規制があってなかなか外部の人間が使いにくいという問題があります。それから、はたして本当に市民が何を求めてるか、あるいは大学が何を提供できるかという情報の交換が難しいこともあります。さらに、地域活動に参画した学生や先生方に対する業績評価をいかに確立していくかも今後の課題ではないでしょうか。

地域と一体となり、市民をリードする大学

(吉田) 私自身が大学で学んだこととしては、勉学以上に先生方の研究を通じて社会に貢献している姿から得るもののが大きかったように思います。また、ニューヨーク市立大学と姉妹校関係にあったということで、ニューヨーク市立大学がいかに市民と一つになっているかを目の当たりにしたという印象があります。

実は、私が所属する金沢創造都市フォーラムは、そもそも金沢大学の地域経済学研究室のOB会の自主研究グループから始まったものです。現在、まちづくりの一環として長町まちづくり事務局に参加し、地域を学ぶための「長町學事始」をやっており、内田先生や中野先生に発起人のかたちに参加いただいている。また、金沢チューリッヒ友好交流協会を立ち上げ、世界と地域を結ぼうという提案もしています。ほかに「明日の金沢の交通を考える市民会議」「石川県に自然博物館を実現する会」「いしかわ自然学校インタープリターの会」などにも細く長くかかわっていこうと考えているところです。

まちと大学との連携強化に関しては、ヨーロッパを事例視察して驚いた都市が2つあります。1つは、ベルギーのルーヴン・ラ・ヌーブというまちで、ここは駅を降りるとまちなのか大学なのかわからないといった大学タウンです。大学の中に自治会があり、役場があり、駅もそのまま学生会館であったりします。もう1つはチューリッヒで、ここもダウンタウンを歩いていくと大学の研究室に着くような、まちと大学が一体化した非常にうらやましいまちでした。

金沢大学も、香林坊ハーバーやビズカフェでの連携のほかに、金沢城周辺の生涯学習の総合施設、NPOの集積施設、あるいはパフォーマンスステージなどを導入し、人材の提供などもしていただけたとありがたいと思います。また、今後の金沢のまちと大学への期待としては、多様な価値観の形成、共存、触発を大学と地域が一つになって進められればと考えています。大学は主に人づくり、生涯学習の機会を提供いただき、まちづくりサイドからは、交流や触発をする場や機会をつくり出していくかたちで、まちづくりと大学との連携が回転していくのではないかと思います。それにはまず、市民社会の確立をリードする大学、大学人、大学像といったものを先陣を切って私たちの目の当たりに示していただきたいです。

市民から見た大学の役割

(西川) 金沢青年会議所は、まちづくり運動、人づくり運動などをとおしてリーダーシップトレーニングをしている40歳までの青年経済人の集まりです。ここ数年は、中心市街地活性化というかたちでまちづくり運動を展開しており、県内で2000年に初めて民間のNPO支援センター、通称 i ネット（石川市民活動ネットワーキングセンター）も設立しました。



そういったまちづくりでの経験上、大学の役割は非常に重たいので、期待を込めて要望を数点述べたいと思います。

まず、交流という切り口でいえば、金沢市周辺には十数校の大学があり、学生数は約3万人、そして毎年新しい学生が6000人前後いると聞きました。この人数は、金沢の人口の中でもかなり割合の高いものとなります。そこで、全国各地あるいは海外から留学生として集まってくる学生たちが、この金沢で金沢の人たちとふれ合うことでいろいろなメリットが生まれるのではないか、金沢の人も、違う文化や違う風土のことを知ることで、自分たちの伝統工芸や文化、風土を違ったかたちで再認識できると思っています。また、将来的には

学生が地元に帰ったり、就職で中央に行った場合には、そこで金沢のPRをしてくれると思いますので、心にしっかりと金沢のことを刻んで戻っていけるよう、大学が学生を応援し、学生が地域の市民と交流できる仕組みを考えいただきたいと思います。

魅力あるまちづくりという切り口では、人が集まるまちには絶対に魅力があります。もちろん金沢にも金沢独自の魅力がありますが、これは何もしないと消えていくのではないかと感じます。この魅力を高めるには、それを補完するようなぎわいの創出が必要です。学生と市民が協働できれば、にぎわいが創出でき、活性化につながるのではないかと思います。

連携という切り口で考えると、今も大学の施設を公開しているケースは多いと思いますが、そこで大学側として一般市民とコミュニケーションを取れる仕組みがあれば、そこからもっと広がっていくものがあると思います。グラウンドや体育館であれば、場所の提供だけでなく指導のプログラムを大学が作る、図書館であれば、本を貸し出すだけでなく担当の方に聞くと歴史のことがわかるなどがあれば、地域の大学に関する理解も今までとは違ってくると思います。人は宝ですので、人と人のふれ合いが生まれるような仕組みを作っていくことが大事なのではないでしょうか。

今年、青年会議所は金沢周辺の大学十数校と総合学祭を企画していますが、将来的にはシティカレッジのようななかたちが実現できればと思っています。

(水野) 皆さんに共通した点は、学生に来てほしいということでした。つまり、今は市民の方々に学生の姿があまり見えていない、これからはいろいろな活動にかかわってほしいというお話だったと思います。また、中心部のにぎわいという点でも、大学の企画力や人材の面でかかわってほしいということでした。私たちとして目新しかったのは、吉田さんから出てきた多様な価値観を持つ市民が主導的な地域社会と大学がどのように連携するかというお話をでした。

樺山先生、これまでのお話を何かコメントをいただければありがたいのですが。

学生の社会参画を促す仕組みを考える

(樺山) 今のまとめの中で一番難しい問題は、学生が見えてこないということだと思います。昔はある程度学生というイメージがあったのですが、3万人もいてもこれが学生だというモデルがなく、学生にどうやって問題を投げかけたらいいかわからないというのが難しいところだと思います。

これは大学の当事者、つまり先生や管理者だけでなく学生自身に、どうやって地域とかかわ



っていくかを大学での重要な問題として考えられるよう、地域貢献のための学、あるいは地域貢献のための技術や方法を学ぶ授業があつてもいいのではないかと思います。

最近ではボランティアに単位を与えようという動きがありますが、それをすると、ボランティアをやらなければならないという義務感が生じてしまったり、ときには罪悪感まで感じてしまいます。そうではなく、大学を出たら社会の一員として活動することが大事になるから、ボランティアなどの社会的な活動に参画し、ときにはリーダーとして働く。そのための方法や技術を教えるカリキュラムがあればと思います。

実際にこれを授業にすることは大変ですが、例えば昔の教養教育課程の中にそのような授業があって、それが結果として社会に出てみたら生きてきたという講義のやり方でもいいという気がします。現場の方々の意見を伺いながら、大学の中にそういう講座や授業ができていけばいろいろな可能性が見えてくると思います。

(水野) ここでフロアからご意見、ご質問をお聞きしたいと思います。

NPOと大学との連携における今後の課題

(山本) 学生が動いていないという話がありました、去年もiネットさんと一緒に「学生ボランティアフェスタ」をするなど、相当送り込んでいるつもりです。ただ、確かに成長は遅い、大人たちが少し手を差し延べてあげないと、一回やってそれっきりになってしまふことが多いのは事実です。それから、受け皿になるNPOなどの雇用創出というものがないと、なかなか学生を金沢に定着させることも難しいでしょう。NPOの民間支援団体にもう少し事業的に展開していただいて連携するかたちにならないと、金沢大学をはじめとして、大学から学生を大挙して送り込むということにはなかなかならないと思います。香林坊ハーバー的なものにしても、今は学生の中でも好意的な人が集まつていて、それ以外はおそらく継続的にかかわってはいないのではないかでしょうか。



地域と大学のチャンネルとしてのNPO

(新) 金沢創造都市フォーラムの理事をしていますが、我々の法人も前に金沢大学経済学部にいらした佐々木先生が理事長をしておられます。その意味で、提供側と受け手側のギャップを埋める仕組みとして、NPOに大学の関係者が参画していただき、中心になって運営をしていただくことが大事なのではないかと思います。大学には、NPOの活動を大学の関係者、職員の方がされることをいろいろな面でサポートしていただく、例えば、大学のある先生の教室



をそのNPO法人の所在地として登記することを認めるなど、大学と地域のチャンネルとしてNPOを位置づけていけばいいのではないかでしょうか。

(水野) 最後に、パネリストからもう一言ずつお願いします。

地域の子育てと大学の知のネットワーク

(谷内) 金沢大学の木村留美子研究室では、金沢市の保育所と連携を取って保育士の指導をしていらっしゃいますが、それがひいては小さき子どもの育成につながります。子育て支援財団は、県内の保育士の研修や福祉施設の職員の研修も行っておりますが、この中に、これまで個々の先生方にやっていた金沢大学の知を、ネットワークとして1本の線につながるようにしていただきたいと思います。

活動をとおして知る学生たちの頑張り

(坂本) 学生のコミットという点では、先程紹介しました子ども科学財団の実験教室や科学相談のコースでは、主役が大学院の学生諸君です。財団が発足して間もなく、理学部で子ども科学財団協力室をつくっていただき、室長が集めてくださったそれらの学生は、1年で延べ100人を超えていたと思います。

財団の活動を通じて、私が大学の研究室で指導していたときには全く見えなかった学生の側面をたくさん発見しました。彼らは小中学生への対応が非常に上手で、私たちがなかなかできないようなことを、子どもの目線に合わせてくれています。これは私自身も驚きで、日本の若者もまだまだ捨てたものではないというのが私の印象です。

大学に地区担当制度を

(吉田) まちづくりは、都市計画もあり、福祉もあり、農林もあり、商工もあり、生涯学習もありとあらゆる部署とかかわってきますので、どの部署へ行つたらいいかといつも迷います。今、まちなみ対策課の主査の方に、長町長土堀地区ならだれと地区的担当を決め、そこへ行けば適切な部署を紹介してくれる制度にならないものかとお願いしているところです。大学も、専門は違ってもその人のところに話を持っていけば相応の人材を紹介してくれる地区担当制度のようなものがあると、非常につながりがよくなると思います。

地域と大学の定例会議

(西川) 金沢大学が中心となって、金沢周辺の大学と市民、そしてこの金沢で営業している企業も絡めて、これからまちづくりについて語り合える定例の機会を設けるべきではないかと思います。そこで出たら具体的にすぐにどうするということではなく、ともに語っていくという定例の会議体をラフなかたちで作ることができれば、そこから何かが見えてくるのではないかと思います。

(水野) 印象として、提供する側と受ける側という立場から、ともに何かを求めていこうという方向もあってもいいという気もしました。語り合える場、あるいは担当があればということもあります。

地域貢献は大学にとってまだ新しい言葉で、今始まったばかりです。これをこれから進めるには、今日いくつかの提案もありましたが、まず近づく、そうでなければ何も生まれてこないということではないかと思います。今日は時間がなくなりましたが、このような機会はこれからも続けていきたいと思っています。

閉会

中村 信一（金沢大学地域貢献推進室長）

樺山先生のお話で非常に印象深かったのは、ヨーロッパあるいは日本でも、地域社会、コミュニティに大学が常に関与していたということです。ただ、その関与のしかたが、以前と現代とでは違ってきているということだと思います。今、大学はこの地域貢献を強く表に出していますが、そのためには大学が変わらなければならないし、また地域社会もずいぶん変わってきました。そういう中で、お互いが今の時代に合ったかたちで協力し、新しいコミュニティをつくっていかなければいけないのではないかと感じました。

おのののパネリストの先生方からはいろいろなお話を伺いましたが、私なりにまとめさせていただきますと、谷内様からは、金沢大学の敷居が少し高い、なかなか大学の顔が見えてこないということでした。そして、里山へ、あるいは大学の中へ子どもたちが来て、子どもと接したことのない学生が実際に子どもとふれ合い、そこから何かを学んでいくことが子育てにつながっていくだろうという新しい提言を受けたような気がしました。

また、坂本先生からは、社会貢献をきちんと大学で評価しなさいという提言を受けました。大学でもそれをやらねばならないと考えております。

吉田様からは、金沢らしいまちをつくるために、金沢大学は生涯学習で大きく貢献してほしいということだったと思います。最後に、金沢大学の学生、職員すべてに模範となる行動を示してほしいというご要望でした。今の時代、何が模範か難しい点もありますが、それも社会に対する大学の使命だと思いますので、厳しくご指摘いただければありがたいと思います。

西川様からは、交流、まちづくり、連携という3つの切り口から具体的なご提言をいただきました。

学生の姿が見えてこないということでしたが、坂本先生にも褒めていただきましたように、学生も結構やっています。ただ、それがわからないというのは問題だと思います。いろいろな意味で、大学の教官が率先すれば学生もそれを見習う、親の背中を見て子どもは育つことがありますので、まずは教官、職員が率先して本日のご提言に応えていくことが肝心ではないかと思っています。本日のお話やご意見を参考に、いっそう金沢大学と地域とのかかわりについて考えさせていただきたいと存じます。

日程

日 時	3月2日(日) 14:00~17:00
会 場	金沢シティモンドホテル(2階 友禅)
主 催	金沢大学、金沢大学・石川県・金沢市連絡協議会

プログラム

テーマ：「地域の声やニーズを大学運営に」
総合司会：松坂 浩史（金沢大学総務部総務課長）

プログラム (14:00~17:00)		
14:00 ~14:10	挨拶	林 勇二郎 (金沢大学長)
14:10 ~15:00	基調講演 テーマ 「地域と大学が創る文化」	樺山 紘一 (国立西洋美術館長)
15:00 ~15:10	金沢大学の地域貢献推進事業 の概要説明	水野 昭憲 (金沢大学地域貢献コーディネーター)
15:10 ~15:25	《休憩》	
15:25 ~17:00	パネル討論 テーマ 「市民から見た大学の役割」	パネリスト 谷内 迪子 (いしかわ子育て支援財団専務理事) 坂本 浩 (金沢子ども科学財団事務局長) 吉田 洋 (NPO法人金沢創造都市フォーラム理事) 西川 雄蔵 (金沢青年会議所副理事長) コーディネーター 水野 昭憲 (金沢大学地域貢献コーディネーター)
17:00	《閉会》	

出席者

110名

金沢大学への要望意見

- ・地域貢献は必要ないと思う。地域の自主性と大学の自主自力を目指す事で自ずから相互の相補性が確立する。
- ・大学キャンパスでの開催も連携に繋がるのではないか。
- ・学生は地域活性化にとって大きな役割を果たすと思う。
- ・今後もお互いに意見を交換する場を継続的に設けられることを期待する
- ・時間が長い
- ・参加者の年齢層が気になる。地域と金沢大学を結ぶ上で、鍵を握るのは学生であるというのは学生が参加していない所で言ってもしょうがない。呼びかけを含めて工夫が必要。
- ・パリ大学がパリ市に溶け込んで存在していることに驚きを感じた。
- ・パネル討論では、学生の長期雇用の問題が少し取り上げられたが、単発の学生雇用の報告が集積されない問題があると思う。システムの構築を願う。
- ・PRがもっとあれば活気あふれるとと思われた。
- ・パネラーの討論がもっと必要、パネラーに内容が伝わっていなかったのではないか。
- ・大学生3万人が金沢に集っている。金沢が魅力ある街となるために金沢大学が果たす役割は大きい。お互いに得るものは大きいのであるから、大学の専門的高度な知を具体的にそれぞれの分野で市民と共に活動する場を一層深める必要があると思われた。
- ・街の活性化や街創りは中味が問題。活性化に参加したくない「少数派」の内にズカズカ踏み入らないで欲しい。
- ・大学の知を広く開かれたものにしようという意識が大きなトレンドになってきていることが伝わってきた、ただ今の大学の知のありよう（高度に専門的）と地域が必要としている知のありよう（総合的）との間にまだギャップがある場合が多いように思う。
- ・大学が子供たちに開放していくことに異論はないが、「子育て」に関して行政が介入しうると、子供のいない家庭に対する差別にもなりえ、「お節介」にもなる。
- ・「文部科学省に戦略がない」という基調講演は少し驚きだった。
- ・各団体の説明ばかりに時間が費やされ、本論についての論議が少なすぎる。もっと一般市民の声を聞く場を設けたらどうか？
- ・「地域と共に学ぶ」という姿勢が新鮮。
- ・1回きりにせず、タウンミーティングという形で続けて欲しい。
- ・大学・県・市の共催事業ということで、県・市で動いてもらつて県民・市民の望んでいるテーマの発展を行つて頂きたい。
- ・討論の接点となるテーマを小さく設定し、短時間でも議論がかみ合うように工夫すべきだと思う。
- ・地域との連携に加え、大学と同様に存在する博物館とのタイアップはどうだろうか？他にも企業、図書館、観光…etcと様々な所で連携の可能性を備えた団体、組織が存在している。1つずつ見ても充実している金沢はもっと大きな文化的飛躍が期待できるのではないか。
- ・いろいろな角度からの提言あり参考になった。
- ・教養教育的なカリキュラムの中に地域や一方でグローバルな観点からの教育が必要である。
- ・ポイントをついた整理をしないと何も残らないし、成果があがらない。学生はあてにできな

い。もっと本質的な事に注目すべき。

要望

- ・金沢大学の先生の教室をNPO法人の所在地として登記できるようにならないか（独立行政法人になれば可能ではないか）
- ・知的財産をいかして、地域住民への開放枠を広げて欲しい。いろいろと講座を催していただいて積極的に参加したい。
- ・金沢大学の地域貢献パンフは、大学の独りよがりで県・市の連携プレイの表現がないのではないか。
- ・持続可能な活動、一時的な文科省の方針に大きく左右されないこと、学生の方も見ること。
- ・大学教官の地域貢献を評価するシステムを構築して欲しい。
学生・教官が既にどのような地域貢献活動をどれだけ行っているか把握してもらいたい。
- ・大学（教官）はまさに研究・教育が中心。大学教官のインパクトの高い発信を期待したい。大学の発展と地域貢献は裏表一体であることを再確認したフォーラムだった。以前の大学と地域から新しい時代に入ってきたと思う、今後も参加したい。
- ・大学との連携は役割を明確にさせて実施することが大切。（学生には意欲づけ（単位取得）では大学が、連携活動への保障は行政というように）
- ・金沢大学は郊外型であるため交通の便が大変悪いように思う。西町にサテライトプラザを設けたり、学生たちの運動を香林坊で起こしたりすることは、その問題を補う点では良いが、大学自体を知るにはまだ十分ではない。金沢大学が開かれた大学であることを知つてもらうためにも、100円バスなどを活用して知の気軽さを体験できると良いのではないか。
- ・地域貢献に関する情報提供の方法が大切だと思う。意義ある貴重な事業が多くても、市民・県民にいかに知つてもらうか再検討願いたい。
- ・石川県・金沢市だけでなく、北陸3県を視野に入れて欲しい。
- ・地域産業の活性化にもっと注力すべきである。財力のない所に文化は栄えない。
- ・他大学との連携・私大との連携を考えて頂きたい。
- ・形式だけでなく、本当に地域貢献するため地道な活動をして欲しい。
- ・科学は自然科学だけではなく、人文科学や学際的分野もある。財団とかの組織に属さず、自らの信念や感性で行動してきている研究者の存在も忘れないで、おざなりな対応から脱却していって欲しい。
- ・COEで文科省からいただいたものが金沢大学発の学問に発展していくことを期待する。
- ・金沢市の地域防災施策は誠にお粗末である、官学連携で施策を早急にまとめるべきである。
- ・金沢市立美大や県立短大との合併はもちろん、国立工専の併設化をも進め、合理化・スリム化・弾力化を目指して欲しい。

アンケート結果

金沢フォーラムの開催を、なにでお知りになりましたか？

学校	19
チラシ	14
新聞	7
ポスター	6
友人	3
HP	2
その他	2
その他（市役所の組織を通して）	2
その他（メール）	2
その他（大学関係者）	1
その他（ボランティア大学）	1
その他（会議）	1
その他（NPO支援センター）	1

基調講演 「地域と金沢大学が創る文化」について

大変良かった	26
まあまあよかったです	15
どちらともいえない	4
あまり良くなかった	4
期待はずれ	0

金沢大学の地域貢献事業の概要説明について

大変良かった	12
まあまあよかったです	23
どちらともいえない	10
あまり良くなかった	2
期待はずれ	1

パネル討論「市民から見た大学の役割」について

大変良かった	3
まあまあよかったです	22
どちらともいえない	8
あまり良くなかった	5
期待はずれ	2

金沢大学の地域貢献推進事業を知っていたか

金沢大学サテライト・プラザ	46
子育て支援システムの構築	16
国際理解教育への外国人留学生派遣	17
「香林坊ハーバー」への支援	28
金沢大学「角間の里山自然学校」	39
初等中等教育支援	13
金沢学への招待	20
"フォーラム「地域と金沢大学」	21
加賀・能登タウンミーティング"	
人的資源のデータベース化	11
地域貢献コーディネーターの設置	21

何で知ったか

チラシ	8
ポスター	6
新聞	13
テレビ	4
ラジオ	1
学校	17
友人	3
HP	7
パンフレット	8
その他	1
その他（授業の話題として）	1
その他（加賀タウンミーティングに於いて）	1
その他（金沢市・金沢大学を通して）	1
その他（前を通りかかって）	1

基調講演要旨

「地域と大学が創る文化」

横山 紘一（独立行政法人国立美術館 国立西洋美術館長）

象牙の塔がそびえる大学は、周辺の地域とは隔絶した存在だと理解されてきました。しかし、これは完全な誤解です。ヨーロッパ中世に成立して以来、多くの大学は都市空間のまっただなかに位置し、教師も学生も、地域社会との密接なつながりのなかで、成長してきました。ときには、きびしい緊張関係をも伴って。21世紀の大学が、この伝統をどのように活かしていくか、その可能性を考えてみたいと思います。

講師紹介

東京大学文学部西洋史学科修士課程。京都大学人文科学研究所、東京大学文学部教授を経て現職。

専門は西洋中世史、西洋思想文化史。東西の文化を果敢に駆け巡る歴史家といわれる。地域社会の復権のために、各地のまちづくり運動に関わってきた。「ゴシック世界の思想像」（岩波書店）、「都市と大学の世界史：新しい大学像を考える」（日本放送協会）など著書多数。

パネル討論

「市民からみた大学の役割」

パネリスト紹介

谷内 迪子（財団法人いしかわ子育て支援財団専務理事）

松任市出身。石川県教育委員会をはじめに、教育・福祉・厚生の分野で、行政の立場から男女共同参画、子育て支援などに深く関わってこられた。2001年からいしかわ子育て支援財団で、市民と地域社会の力による子育て支援の実現に尽力されている。

坂本 浩（財団法人金沢子ども科学財団事務局長）

高知県竜馬の故郷出身。大阪大学で物理化学を学び、大阪府立放射線中央研究所、東京大学、米国アーカンソー大学につづき、1972年から金沢大学で放射能と放射線の研究と教育に携わられた。2000年から金沢子ども科学財団で、小中学生を対象にした実験教室、屋外での科学体験活動などに幅広く取り組んでおられる。

吉田 洋（特定非営利法人金沢創造都市フォーラム理事）

根上町出身。東京都立大学で地域生態学、都市地域環境論などを学んだあと、県内で建設総合コンサルタントや建築・計画事務所で地域計画に携わる。白山山麓から能登、富山までの各地のまちづくり事業に参画されている。長町まちづくり事務局、石川県環境ビジネス研究会など数多くの市民団体で積極的な活動をされている。

西川 雄蔵（社団法人金沢青年会議所副理事長）

金沢市出身。金沢青年会議所が中心となって設立したNPO法人 i ネット（いしかわ市民活動ネットワーキングセンター）に関わってこられた。市民によるさまざまな社会サービスの提供や新しい提言活動等に意欲的に取り組む市民団体の活動支援をとおして、市民活動が21世紀の地域社会を発展させると考えている。